小代ゼミナール　報告
「観光地としてのサイパンと日本」

日本大学国際関係学部国際交流学科主催
2008年度ゼミ・フィールドワーク発表会
（2008年12月6日　5限　於15号館1512教室）

総合編集：　中沢彩乃
執筆協力：　大久保和美・時田亮・中沢彩乃・安田圭佑
口頭発表：　中沢彩乃・安田圭佑
パワーポイント作成：　太田なつみ
パワーポイント操作：　福本拓也
指導教官：　小代有希子

１．はじめに

私たち小代ゼミナールは、２００８年９月８-１２日の５日間、サイパン研修を実施した。ゼミナール研修でサイパンを訪れるのは、去年に続き今回で２度目である。昨年度は、「植民地と戦争を経た交流のかたち～サイパンの場合～」というテーマで総合報告書を作成した。今年度は、テーマを「サイパン経済を支える観光と日本の関わり方」に絞る。

昨年以来サイパン経済は悪化していた。島全体の電力供給問題、燃料費の異常高騰などのあおりで、中国･フィリピンの安価な移民労働力に依存した縫製工場があいつぎ閉鎖し、商店、レストランなどのビジネスも閉店を余儀なくされていた。こうした中、サイパン経済を支える観光産業の安定と成長は急務であり、日本人観光客の関わり方を考える必要がある。

今回の報告では、日本植民地だった時代の建造物や太平洋戦争の傷跡をサイパン観光の中でどう伝えていけるかという点と、日本人観光客がサイパンのあり方に及ぼす影響という点を、北マリアナ政府観光局の立場、環境保護団体の立場，　そして日本外務省の立場、という３つの視点から分析していく。サイパンの歴史などの概略については昨年の報告書を参照していただきたい。

２．北マリアナ観光局の立場から

サイパン滞在中表敬訪問した北マリアナ政府観光局では、上に述べたサイパンの経済危機の中で、『産業的によい影響を与えてくれる観光客は、何より大事』ということを強調する話しを聞いた。

サイパンの経済にとって観光産業の影響は莫大だ。　ところが年間観光客数の半数を日本人が占めるにも関わらず、２００５年、日本航空（JAL）は、日本～サイパン間の運航廃止を決定した。　現在日本～サイパン直行便は、ノースウェスト航空が運行するのみという状況に陥り、サイパンは大きな打撃を受けてた。

日本人観光客をサイパンに呼び戻すために、サイパンの魅力をどうアピールしたらよいか、ということは観光局の大きな関心である。　観光局の日本観光担当者は、サイパンが戦前に日本の植民地であったことや、太平洋戦争における激戦地であったことは、日本人が気分を害するネガティブなイメージであると考えており、観光地サイパンのイメージとしては前面に出したくない、と私たちに語った。

さらに『アジアの一部としてのサイパン』というイメージも強調したくないようである。日本人が観光でアジアの魅力を求めるときは、近くの中国や韓国に行くはずだからだという。　彼らに売りたいサイパンのイメージは、『日本に近く自然が豊かで、ゴルフ、ダイビングなどのレジャー設備も整った、青い海と空の南国リゾート』だという。

さらに『アジア』のイメージより『アメリカンな場所』ということを前面に出すほうが日本人受けすると考えているようだ。　確かに日本人はそういったイメージそのものだけを求めてサイパンにやってくる場合がほとんどだ。

しかし果たしてこのアプローチで良いのだろうか、とゼミ生は考えた。　今回の研修でも、私たちは数多くの日本植民地時代の名残りの建造物や戦跡を見たが、そこに日本人観光客の姿はほとんどなかった。(写真１、２) 観光局の言う通り、現在のサイパンでは、住人たちの間でも戦前の記憶は風化しつつあるのかもしれない。しかしこのまま、日本がサイパンと深く関わってきた過去の事実から　日本人自らが離れていくことは、間違っているように思う。日本人は、今まで自分たちがやって来たこと・自分の国がやって来たことについて、知らなければいけない義務と責任がある。

サイパンのイメージから「アジア的なもの」を消したい、という点にも疑問が残る。サイパンには、アジアの諸地域からの移民が多く暮らし、彼らはうまく共存している。フィリピン・中国・韓国・日本の料理店、食材店など多くあり、島内にはアジア的な

ムードが漂い「リトル・アジア」といった状況を作りだしている。(写真３、４）それなら、南国とアジアのイメージを組み合わせて、『南国とアジアを同時に楽しめる島』というイメージで売り出せば、よりユニークで、魅力的だし、実際その方が島の現状を正確に表すのではないかとも思った。

今回の研修で見たサイパンでは、発展しているのはガラパン周辺のみで、他の地域は現在の経済悪化の中でさびれているように思われた。　観光局が考え目指したいサイパンのイメージと、実際のサイパンとでは、大きな隔たりがある。

３．環境保護の立場から

サイパン沖合２．５キロメートル場所に位置し、バナナボートやパラセーリングなどが楽しめるため、マリンスポーツのメッカとして日本人観光客からも人気が高い島、それが「マニャガハ島」である。　まさに観光局の掲げる「青い透明な海」「青い空」のイメージ通りだ。　日本人観光客がこの島で1日を過ごし落とすドルによってサイパン全体の経済は潤う。　しかし日本資本がこの島を観光スポットとして開拓して以来、貧しい生活を送るチャモロ人やカロリニアン人などの原住民の人々は、魚がよく獲れるこの島へ近づくことを禁止され　生活が苦しくなった。「あこがれのトロピカル・アイランド」は「日本人が乗っ取った島」なのである。

戦前の日本統治時代のサイパンは、松江春次による製糖業の起業によって、島中にサトウキビ畑が広がり農業に適した島だった。しかし太平洋戦争が始まると　米軍による激烈な空爆によって島の土壌は悪化し，地形も変形してしまった。さらに戦後は、戦闘の傷跡を隠すためにアメリカ政府が意図的に植物生態破壊を行ったため、土壌浸食が進み、戦前の農産業は成り立たなくなってしまった。

漁業に関しては、原住民であるチャモロ人やカロリニアン人が主な従事者で、かつてはサイパンの主な産業の一つであったが、マニャガハ島周辺を日本が開発してしまったことの他に、ゴミによる水質汚染の影響によって、漁獲量は年々下がる一方だという。観光用ホテルの前のビーチは手入れされて奇麗であったが、離れた場所では、汚染がひどく、遊泳禁止になった場所も少なくないらしい。

さらに温暖化問題はサイパンをも襲う。研修中私たちがバーベキューを行なった所は、日没も近く潮が満ち始めていた時とはいえ、ビーチの幅がこれまでの半分以下に減ったそうで、ようやく水辺を歩ける程度の砂浜しか見られなかった。 現在、キリバスを始めとしたミクロネシアの島々を襲っている海面上昇が、サイパンでも深刻化しているという現実をありありと見せられた瞬間であった。

北マリアナ観光局は、チャモロ文化、カロリニアン文化なども島のイメージアップに使用しており、チャモロ人の祭りや手工芸品、音楽、食べ物などを観光客に積極的に紹介してきた。だが、チャモロ料理のレストランには　なかなか観光客などの興味が集まらず、チャモロ文化を紹介した『地球人村』という教育アトラクションは経営不振で閉鎖されてしまった。　かつて彼ら先住民族が住んでいたサイパン島は、消滅しつつあるのだ。

以上のような島の危機的状況については、サイパンの環境問題に取り組んでいる地元の運動家が私たちに語ってくれた。サイパンには、地元住民による環境保全運動が多く見られ、ビーチの清掃や、サイパンの象徴的樹木である、フレームツリー(火焔樹)の植樹活動、島内に残る史跡の保存手入れなどを行っている。(写真５）政府よりもむしろ、市民レベルでの環境保全の動きが活発なようだ。

水質汚濁や、ゴミ問題には、私たち日本人やその他の国から来た観光客が大きく関わっている。サイパンの環境を壊していったのは、外部から入ってきた人間なのだ。地球温暖化の問題も含め、私たちは観光客としても、サイパンの環境保全について本気で取り組んでいかなければならないであろう。

４．日米外交上の問題

私たちは、在サイパン日本領事駐在官事務所長である領事を表敬訪問し、領事からサイパンの概略、現状、日本との関係などについて話しを聞き、その後質問をさせていただいた。領事はサイパンへの着任まもないためか、サイパン島内に残る日本統治時代の遺物である　日本家屋などの存在をまだご存知なく、さらに島伝統のチャモロ料理を一度も食べたことがないと言う。

すぐにでも両方を見知っていただきたいと思うゼミ生たちはまず、日本政府が日本統治時代の建造物（家屋、神社、サトウキビ列車など）や、太平洋戦争の名残を保存・保護するために尽力すべきかどうか質問した。サイパンという島は普通に街を歩けば、太平洋戦争時にアメリカと日本が戦った際に使用された戦車、高射砲、弾丸庫などの残骸が　当たり前のように目に入り、島のあちこちには日本人墓地、慰霊碑などもあり、戦争の傷を負ったままの島にも感じられる。

領事は、あくまで個人的見解と断わった上で、日本の企業が援助する分には全く構わないと思うと述べられた。　しかしもっと重要なことは、サイパンは、現在アメリカ自治領だが、2009 年６月に向けてアメリカの直接統治が強まり、「連邦化」が加速化

しているということだ。　つまり日本統治時代の建造物・遺跡保存活動に関しては、アメリカ政府の意向を差し置いて、日本側が単独で動くわけにはいかず、アメリカ側の意志決定をまず尊重すべきであろうという外交姿勢だ。 私たちは　日本がもっと確固たるかかわり方をしていく方がよいと考えていたので、領事の見解は意外でもあり残念だった。

太平洋戦争の悲劇を伝えるさまざまな跡地の保存に関しても、複雑な歴史背景がある。領事の話しによると、当時米軍に追い詰められた日本人が断崖絶壁から海に身を投げて自害したバンザイ・クリフは　あまりに有名で観光的に利益があるために、整備がされているという。（写真６、７）

しかし他の知られていない場所は事情が異なる。３．でも述べたように、米国政府は戦争が終わるとすぐさま　サイパン島中に無数に散乱した死体や戦跡を「隠す」べく、タンガンタンガンと呼ばれる１ヶ月ほどで急成長するマメ科の植物を、島中に空中散布した。バーベキューなどに使う炭にするしか使い道のないこの植物は、強靭な繁殖力を持ち、あっという間に島全体を覆い尽くして、日本統治時代の名残りと戦争の傷跡を林の中に封印してしまった。

日本とアメリカは政府レベルでも、こうした歴史的事情を共同で掘り起こしていくところから始めないとならないのではないか。　そうしないと今後こうした歴史的遺産をどう保存していくかについて全く話しがすすまない。

確かに、現在のサイパンでは、アメリカが持つ権力の拡大が目立ってきている。近年日本・韓国・フィリピンで、米軍撤退を求める動きが活発になり、米軍は新たな駐屯地として、アメリカ自治領であるサイパンを最有力候補地と考えているらしい。実際にサイパン周辺で米軍が軍事演習を行なう計画も着々と進んでいるという。こうした事態について、サイパン内では、アメリカを警戒する声と、歓迎する声の両者があるようだ。後者の理由としては、アメリカが行ってくれるであろう支援への期待がある。

今後一層のアメリカ化が進むと、サイパンにわずかに残る『日本の過去』は完全消滅するしかないのではないか。　日本としては、アメリカに日本統治時代の遺跡の保存を要請依頼するという受身の方法しかないのだろうか。

５．まとめ

以上のような問題をはらむサイパンを　私たちは「観光地」としてどう理解していく

べきだろうか。

　サイパンと日本が戦前から深い関わりにあることを知る人は少ない。だからこそ、今もなお日本からの遺跡保存の動きが一向に見られない。観光産業なくしてサイパンが成り立たないのならば、植民地や太平洋戦争の遺跡を訪問スポットにして、平和教育・国際交流啓蒙の場とすればよいのではないか。　隣のテニアン島は、原爆搭載機エノラ・ゲイが離陸した島であることから「平和」をテーマにしたツーリズムを開発しているとのことだ。　サイパンでもそういうテーマを積極的に押しだして、日本の学生が学びに訪れる島にすることは可能でないか。

　実際サイパンでは　Edu-Tourism (Education + Tourism　教育観光)で『島興し』をしようという動きも始まっている。　今回ゼミ生は　Ladera International School という新設校を訪問した。この学校では徹底した米国式の教育を行い、学生はアメリカ本土の大学への進学を目指すので、地理的に近いアジア諸国、特に韓国から「留学」してくる学生が多いという。（写真８）Edu-Tourismの発想として、この島全体を植民地、戦争の意味を考えるアジア環太平洋の一大教室にして、学生たちの研修の場にすることも可能ではないか。　日本人はその企画に積極的に賛同支援できるのでないか。

　今後日本はサイパンと交流を円滑に行っていく上で、サイパンの成長を助ける観光業を活発にする手伝いができると考える。　最近は、ありふれた観光スポットを巡るものよりも、より内容や目的を絞ったツアーの方が、観光客に人気があるという。だから日本人観光客に日本史の理解はもちろんの事、チャモロ人を含むサイパン側から見たサイパンの歴史や文化、現状について興味深く知ってもらえるようなツアーを企画する手伝いができないだろうか。

「観光客が興味をもたない史跡・戦跡を切り捨てる」でなく、「観光客に関心をもってもらえるような戦跡・史跡のプレゼンテーション」を考えるのだ。　観光客が興味を持ち出せば、アメリカ政府も保存に向けて動かざるを得ないだろう。ツアーに、エコロジーも含めれば、より独創的で、かつ魅力的なものになりうる。

　私たちのゼミは今後も、過去・現在の両方でのサイパンと日本の関わり方について総合的に学んでいき、いずれはこうした具体的な取り組みをしていけたらと考えている。

＜参考写真＞

写真１：日本の植民地会社の事務所跡

写真２：荒廃し倒れている鳥居

写真３：韓国人の経営する日本風居酒屋

写真４：サイパン風アジアン料理の屋台

写真５：現地ボランティア団体とのビーチ清掃

写真６：バンザイ・クリフの慰霊碑

写真７：日本軍戦車の残骸

写真８：Ladera International School にて